

## パネルディスカッション

日本海学シンポジウム

平成 25 年 1 月 19 日 (土) 13:30~17:00

北日本新聞ホール

### 「森・里・海」の自然観がつくる生活文化

コーディネーター

米原 寛 氏 (富山県立山博物館 館長)

パネリスト

田中 克 氏 (京都大学 名誉教授)

布村 昇 氏 (前富山県生物学会 会長)

佐伯 安一 氏 (富山民俗の会 代表)

講評

山折 哲雄 氏



(米原) 皆さん、こんにちは。冒頭に山折先生の、ある意味では感動に残る素晴らしいお話をお聞きしました。「自然観から捉える、森・里・海」ということで、日本海学シンポジウム 2012 年をこれから進めてまいりたいと思います。壇上においでになる 3 名の方のご専門の話をお聞きしながら、最後は今われわれが置かれている課題は何なのかについての

ご提案をいただければ、大変ありがたいと思います。

今ほど山折先生のお話をお聞きして、いろいろな講演もお聞きしたのですが、今日はまた違った意味の感動を覚えさせていただきました。先生は、人に対する愛情が非常に深いということがよく分かりました。そんな意味では、人の愛情に基づいたといいますか、人間愛に基づいた思索の旅人というのが山折先生のプロフィールではないかと思っています。先ほど、「落日の思想」をお話しいただきました。控え室で3人とも、この「落日の思想」というのはまさに美学である、その背景にあるのは何なのかをこれからお話ししていきたいといった話もありました。先生のお話をある意味では形而上学的なお話とすれば、その背後にある自然の世界の姿、循環やひとつながりの世界とも申されていますが、そこらあたりの実態の姿、そしてまた、そういう自然を背景にした日常の生活文化にも焦点を当てながら、これから約2時間ばかり、ご論議をいただきながら、今何を考えるべきか、どういふ行動を取るべきかを示唆いただければ、大変ありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、前置きはこれくらいにして、早速、3人の先生方には20分程度、各先生方の持ち味を少しお話しいただき、その中からテーマである自然、あるいはその中からはぐまれた自然観、その中の息づかいとして日ごろ日本人が営んできた生活文化という流れの中で、お話をしていきたいと思います。

まず、順番とすれば田中先生の方からとなると思います。先生は子供のころの原体験がきっかけであったというお話をされていました。それを踏まえながら、研究の方は稚魚の魚からスタートされ、その後「森、里、海」という三つひとつながりの研究に入られ、最近、連環ということを提唱されています。最後には、先生の自然観もお話しいただきながら、20分お使いいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 報告1 「私の自然観の背景」

田中 克 氏(京都大学 名誉教授)

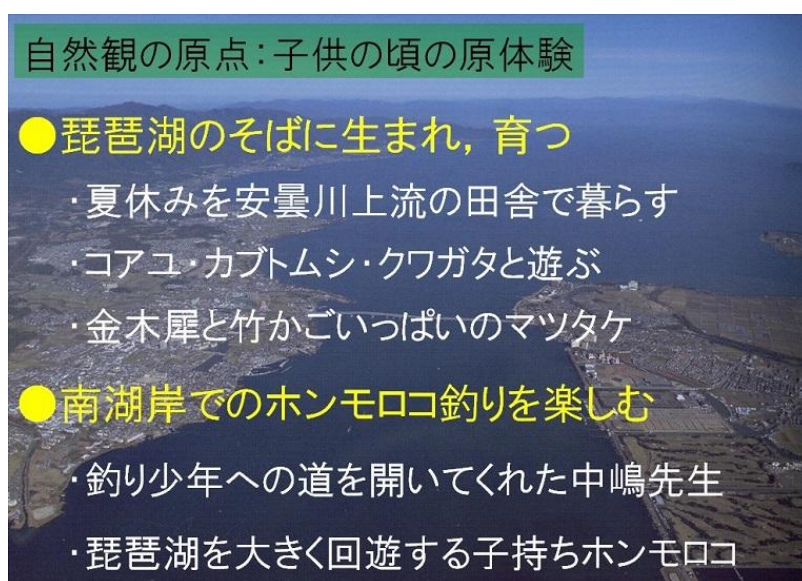
皆さんこんにちは。山折先生のお話をお聞きして、私に浮かんだイメージは、落日を眺めながら今を見つめ明日の夢を語る、肩を寄せ合う若いカップルです。それは悠久の昔、私たちの先祖が海から陸へと



進出した舞台のきれいな砂浜が広がる渚の風景です。しかし、大変残念なことに、日本からそのような渚がどんどん消えつつあります。そういうことにつながるお話を少しさせていただければと思います。私自身、あらたまって自然観を考えたことはないのですが、このような機会を与えていただいたことが、日ごろの暮らしや取り組みをそのような視点で振り返る機会になりました。

## 1. 自然観の原点: 子供ころの原体験

これは琵琶湖の南の方から北を見た航空写真です。



琵琶湖は浅く小さな南湖と深く広い北湖から成ります。ここで生まれ育ったのが私の出発点と言えます。子供のころ、夏休みには母の実家があった湖西の安曇川上流の田舎で過ごしました。もちろんそのときの友達も、アマゴやコアユであり、カブトムシやクワガタでした。もう一つ、田舎とのつながりで今も鮮明に記憶に残っていますのは、キンモクセイの香りが漂う秋の訪れと共に、毎年新しい竹籠いっぱい詰まったマツタケが母の実家から送られてきたことです。今のお金にすると何十万円にもなるでしょう。4人の男兄弟の中で唯一マツタケが大好きだというおかしな少年でした。私にとって「森、里、海」のつながりの再現は、おいしいマツタケをもう一度いっぱい食べたいという思いが背景にあるのかもしれないと思っています。

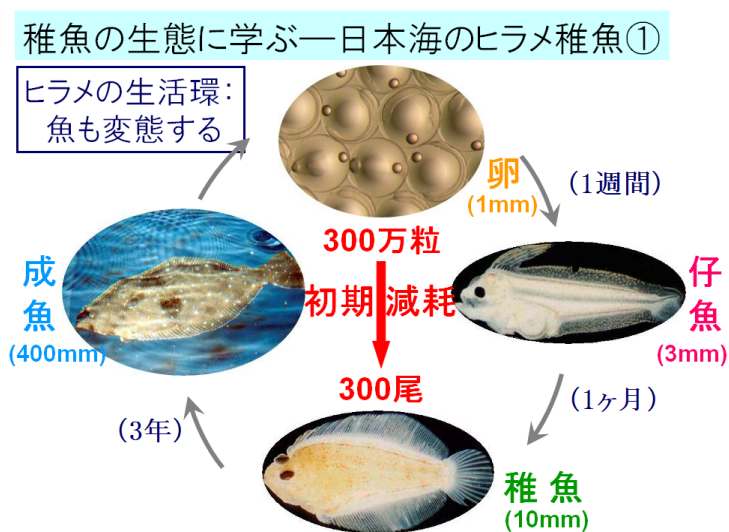
琵琶湖は、漁業調整法上は海区とされていますし、魚たちにとっては海そのものです。

北湖の深い海で越冬したホンモロコが、春先、水がぬるむころに何十キロと琵琶湖を下って、南湖の湖岸の浅場で産卵します。そのことを教えてくれたのは、伝馬船を漕いでホンモロコ釣りに連れて行っていただいた小学校5、6年の担任の中嶋昭先生でした。それが今、こういう場でお話をするきっかけになったと思います。近くの京都大学に魚の研究をする学科があったものですから、迷うことなく農学部水産学科に進んで魚、特にその子供たちの研究に取り組んできました。この間、一番重視してきた魚の一つが日本海の沿岸域を代表するヒラメです。

## 2. 稚魚の生態に学ぶ—日本海のヒラメ稚魚

これは、ヒラメの親、卵、それからこちらは保育園児でしょうか。そして、幼稚園年長組から小学校低学年くらいに相当する稚魚。このような一生を過ごすわけですが、これらの卵や子供のころはずっと沖の深い海を流れのままに漂っているわけですが、ヒラメの形をした稚魚に変態して現れるのが、不思議なことに水際なのです。皆さん、夏に富山湾の海水浴場に出かけた情景をイメージしてみてください。波が静かな穏やかな日だったら、ひざくらいの所にこのような稚魚たちが「自分たちの方が先人なのに」とつぶやきながら、子供たちに踏まれるのを避けながら暮らしている世界が広がっているのです。

300万個の卵が、わずか1カ月～1カ月半の間に、餌不足や外敵に食べられて1万分の1程度に減ってしまいます。そのことを初期減耗と言うわけですが、最近の技術では300万個の卵から200万尾以上の稚魚を育てることが可能になっています。そういったヒラメの稚魚も所変われば品変わる、地方によって暮らし方、生き方を変えながら生きています。



私は鹿児島県の吹上浜から北海道の稚内までの沿岸域を、車に乗って全国行脚しながら、いろいろな浜でヒラメの稚魚を採集する全国調査を3年に1回繰り返していました。この写真の皆さんのように、富山県や高知県の水産試験場で頑張っている人、奄美大島の国の研究施設でクロマグロの種苗生産を研究している人がいますが、ひょっとするとこのような現場体験が原体験になって自身の終生の仕事を選んでくれたのかもしれない。

これは白神山地のブナ林ですが、20 数年のヒラメ稚魚研究の結論として、「白神山地のブナ林がヒラメ稚魚を育む」という仮説に至りました。白神山地のブナ林は日本海の豊かな森の象徴です。そして、ヒラメ稚魚は日本海の波打ち際にいる生き物の象徴です。こういうつながりが私なりに見えてきたということになります。

### 3. 稚魚の生態に学ぶ一有明海の不思議な魚たち

もう一つの私の大事なフィールドは、九州有明海です。富山湾のように山に囲まれ、九州最大の筑後川はじめ大きな川が流れ込んでいます。ここには日本中でこの海にしかいない生き物（特産種）がたくさん棲んでいるという意味では極めて重要で、また、興味の尽きない海です。有明海は、今まで日本で一番豊かな海として注目されてきましたが、ここには世界中でここにしかいない淡水生活のアリアケヒメシラウオや、カタクチイワシの間である産卵のために海と川を行き来するエツなどが生息する生物多様性の面からも掛け替えのない海なのです。

こちらの魚はヤマノカミです。皆さんのご家庭にも山の神に類する存在がおられるのかもしれませんが、森の人たちが言う山の神というのは、九頭竜川のアラレガコ、カマキリの親類です。彼らは産卵期に海に下ってきて、河口域で産卵し、親は卵から子供が孵化するまで新鮮な海水を送りながら見守り、その後は息絶えて“海の神”に子供たちをゆだねます。

これはハゼクチです。ハゼというと、皆さんはせいぜい5~10cmのイメージでしょうが、このハゼはどれくらいの大きさになると思いますか。最大64cmが記録されている“巨大な”ハゼです。そういう巨大な生き物を育むくらい、この海は豊かな海だということになります。

今、日中関係はいろいろぐしゃくしていますが、生き物の世界の1万年~10万年といった時間スケールで考えてみると、別の側面が見えてきます。実はこの有明海のスズキは、最終氷河期に誕生した中国のスズキと日本のスズキの間に生まれ、不思議なことに有明海

においてのみ生き残った日中合作のあいの子なです。そういう視点で日中関係を捉えてみると、また少し違った視点になるのかもしれませんが。

類まれな豊かな海が、今では日本の沿岸漁業と沿岸環境を再生させる上での試金石と位置付けられるくらい、極めて深刻な瀕死の海に至っています。かつては獲っても、獲っても、獲り尽くせない宝の海と言われほど、本当に豊かな海でした。例えば、アサリは1980年～2000年のわずか20年の間に、8万tから千～2千tに漁獲量が激減しました。そして、多くの漁師さんやその家族の方が自ら命を絶たなければならないという悲劇の海に至っています。

それを引き起こした3大要因の一つが、諫早湾の締め切り堤防の設置と湾奥部の広大な泥干潟の埋め立てです。これは全長が7km、建設費が2500億円。これによって水の循環をなくした海は汚れに汚れて、アオコと呼ばれる有毒なプランクトンが大発生して大きな問題になっています。また、この湾奥部に存在した広大な泥干潟にはハイガイをはじめ無数の生き物が生息し、人口30万人くらいの都市が排出する水を生物的にきちんと浄化してくれる仕組みがあった海を埋め立ててしまったのです。

もう一つは、濁りと汽水の有明海の命の川である筑後川の河川敷から、過去50年に高度経済成長期を中心に大量の土砂がコンクリートの素材とするために持ち出されました。その総量は、甲子園球場に山盛りに積んで30杯くらいの量です。この砂の多くが有明海に流れて、先ほどのアサリがいる干潟を更新し続けてきました。干潟は一種の生き物ですから、土砂の流入が止まると疲弊し、アサリやそのほかの生き物が住めなくなります。そうすると、生物浄化能力が衰えて、赤潮が発生し、その過剰の有機物を分岐するために酸素が消費される結果海が貧酸素化して、さらに漁業を困難にします。

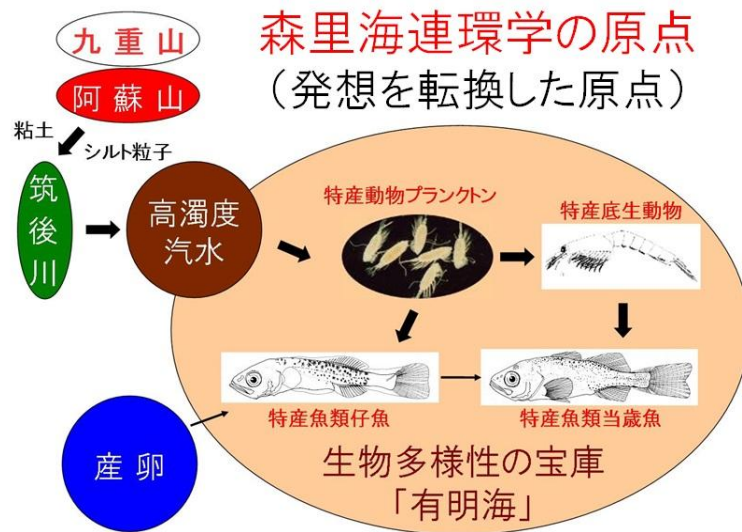
もう一つの原因は、河口から23km上流に筑後大堰を1985年に造って、福岡大都市圏に大量の水を回したことです。その水は、本来は有明海の生き物やそれを生業とする漁師さん、その恵みを受ける市民が享受すべきものでした。その水が福岡に流されたわけです。これらの現因の複合により、有明海はどんどん疲弊し続けています。これまで、個々の原因についての指摘はなされて来ましたが、これらすべてに共通の本質は、森と陸の人為的な分断そのものなのであるとの指摘はなされていません。これらは形を変えて日本のいろいろな所で進行していると考えています。

有明海の調査は今年の春で34年目を迎えますが、体力と気力が続く限り、とりあえず40年目までを目標に調査を続けようと思っています。50年はいくら頑張っても無理そうな

ので、そこは後継者に委託しながら、50年間継続した調査ができれば、少しはまともなことが言えるでしょう。

現在の到達点はこの模式図にまとめた通りです。

### 稚魚の生態に学ぶ—有明海の不思議な魚たち③ 阿蘇・九重山系が有明海の稚魚たちを育む



結論だけ言いますと、阿蘇・九重山系が有明海の稚魚たちを育みます。これが真水と海の水が混じった汽水域、河口域です。多くの動物プランクトン、アミ類や稚魚がたくさん生息しています。ここが成育場、幼稚園のような場所になります。それを支えているのは、とても濁った栄養たっぷりのスープのような水です。すなわち、ここには阿蘇・九重山系から土砂、シルト、栄養塩、鉄分などいろいろな物質が不断に供給されているわけです。真水と海水が最初に出会うこのあたりで鉱物粒子の凝集、その周りに動植物プランクトン遺片や細菌が吸着して栄養価の高い有機物質が生成され、それが稚魚を育む動物プランクトン（カイアシ類）を増殖させます。ですから、有明海の稚魚たちがここでどんどん成長するのは、元をたざせば九重や阿蘇という山の存在になります。これが私自身の「森里海連環学」の個人としての原点です。

#### 4. 稚魚研究から森・里・海のつながり研究へ

このような研究を“わき目もふらず”続けてきましたが、還暦を迎えるころ、今までやって来たことを振り返ることになりました。それは、個人的には孫が生まれる時期にも当

たり、この子たちの未来を考えることに行き着きました。そんなこともきっかけとなって、壊し続けてきた自然の再生につながる新たな学問「森里海連環学」へと踏み込むことになりました。

稚魚研究 40 年の教訓、いろいろな具体的な個別の成果があるのですが、このように要約できます。生き物を見るときは、長期的、広域的に、そして総合的にという三つの視点が大事でしょう。長期的視点は時間のつながりですし、広域的視点は空間のつながり、総合的視点は物事にある多様な側面間のつながりですから、すべてはつながりです。今の社会は、全くこれに反する方向に動いていると思います。

## 5. 森里海連環学の展開と深化を目指して

それほど長く自分で研究できる時間は残されていないのですが、これからは“償いの研究”を進められればと願っています。稚魚の研究のためと称して、今まで恐らく 5000 万～6000 万くらいの魚の子供や卵を殺してきましたが、一切、彼らの幸せに貢献していないことを思い知らされています。稚魚研究に熱中しています間に、彼らが育つ上で掛け替えのない森と海の境界域に当たる干潟・藻場・河口域・砂浜海岸などが著しく壊されています。残りの人生はその再生にかかわる研究を進めたいという思いに駆られています。これまでのまとめとして、2003 年に「森里海連環学」を立ち上げるに至った話をさせていただきます。こちらの本は、一人の研究者の歴史のようなものですが、問題はこちらの「連環学の展開」の本です。本来なら、すでに出来上がっていたはずなのですが。

なぜでしょうか。それは 3.11 の東日本大震災の発生によります。この写真は気仙沼市の魚市場の屋根ですが、10 メートルを超える所まで津波が押し寄せて、すべてが飲み込まれました。巨大な津波の前に人も魚も同じように翻弄されました。人間は偉そうなことを言っているけれども、自然の前にはすべての命は同じなのだとの思いに至りました。自然の圧倒的な大きさに対して、畏敬の念を取り戻すことが重要だと思うのです。大量生産・大量消費の物質文明を見詰め直す、近代的先端技術への過信、自然をあたかも技術で制御できるとの過信を戒めるということです。そして、人はいかに自然と折り合いをつけながら、より持続循環的に生きるかを問い直す必要に迫られました。多くの皆さんが同様のことを感じ、また、今の日本を動かしている政治のトップの方々も、一時的にはそのように考えられたのではないかと思います。しかし、まだ 2 年もたっていないのに、日本の社会は今急速に U ターンをしていることに非常に危機感を感じています。



これが気仙沼湾のひとつの小さな支湾である舞根（もうね）湾です。皆さんもご存じの「森は海の恋人運動」発祥の地です。人はいいことをしていても、悪いことをしていても、年齢や性別などに関係なく、みんな一様に自然の被害を受けるわけです。この舞根湾にも津波が直撃して、ここのカキやホタテガイの養殖漁業は壊滅しました。「海の中で何が起こったのか」、これが早く養殖業を再開したいと願う漁師さんたちが一番知りたいことでした。しかし、三陸の多くの試験研究機関が壊滅し、すぐには調査ができない状況でした。私はなるべく早く、できるだけ総合的に、そして、森から海までをつないでしっかりとした調査をすることが極めて大事だという思いに駆られて、既存の組織や研究費に頼ってはいは無理だと判断し、志のある研究者に呼び掛けて、ボランティア研究チームを作り、既に 11 回の調査を続けています。

その中で特筆すべきことは、もともとは干潟や湿地などの海の一部が埋め立てられ、宅地や農地に変えられて、そこに建てられたすべての建物が倒壊・流失しました。さらに、地震により地盤が 70cm 前後沈下して、満潮時には潮が入り、元の湿地や干潟に戻ってきているのです。これは、いわば巨大な地震の贈り物だろうと思います。人間が自然をつぶし続けてきたことを、それでいいのかと論すかのごとくです。そのような場所には、今、エビ類や多くの魚類があふれ出し、それを捕るカワセミがしばしば観察されるようになっています。

そして、干潟的環境にはアサリの稚貝がたくさん現れました。これが最も典型的な写真です。この写真は岸壁上です。今は潮が引いていますから水には浸かっていませんが、ここに満潮時には水につかり一時的に海環境になりますから、アサリの子供たちはここを海だと認識して、こんな所にまで住み着いているのです。自然の生き物のたくましさに驚かされるばかりです。

どれだけのアサリが増えているかを示す典型的事例が、この写真です。携帯電話が置かれているので、大きさは分かると思います。25cm 四方の広さの砂礫の中から、大小 170 個のアサリが取れました。これらは震災後に生まれて、元気に育ったものです。大きなものは殻長 3cm を超えて既に食べごろになっていますし、次世代を生み出すサイズになっています。そのようなことが、震災の海では起こっているということです。

この写真は皆さん、何だと思われませんか。ポールの上に大漁旗。高さ 14.7m です。ここに設置が計画されている防潮堤の高さです。人の大きさと比べると、その高さがイメージできると思います。14.7m というのは気仙沼市で最大規模の防潮堤ですが、これを支える

ためには、90m くらいの幅のしっかりした土台が要ります。そういうものは景観、生態系、環境だけではなく、この地域の養殖漁業、観光産業に致命的な影響を与えるでしょう。また、海を見ながら暮らしてきた地域の人々の心にも大きな影を落とすことにもなるでしょう。三陸でこの巨大防潮堤がこのまますんなりと進んでいけば、東海・東南海・南海地震に備えて太平洋沿岸に防潮堤が築かれるでしょう。日本海でも今、地震が発生する可能性がいろいろ言われていますから、日本列島全体が防潮堤に囲まれてしまうことになりかねません。山折先生もおっしゃったように、自然豊かな、たぐいまれな海と森に恵まれた日本のこれから生きる道は、日本全体を防潮堤で囲むことなのか。それしか日本には知恵がないのかということになると、日本は世界から見放され、そのつけは続く世代が背負う（背負わせる）こととなります。それほど重大な問題だと思います。

## 6. まとめに代えて

最後になります。私は、これまで自身の自然観というものを、あらためて考えたことはなかったのですが、やはり原体験に大きく関係するものだという気がします。そして、身の回りの生き物すべては人類よりはるかに長い歴史を生き抜いてきた、いわば私たちの先人です。私たちホモ・サピエンスは、せいぜい 20 万年の歴史しかありません。何億年という歴史の中をくぐりぬけてきた生き物から謙虚に学び取り、何よりも津波の海とともに、生と死が背中合わせの海と共に生きようと頑張っている人たちの未来を確かなものにするために、今後も関わっていきたいと思っています。

それは、やはり目に見えないつながりを大事にすることでしょう。そのつながりの最たるものは、命のつながりです。私たちが日々食べている食べ物は、ほとんどそのことを意識しませんが、すべてほかの命です。そういう中に私たちは暮らしているということを考えると、やはり命のつながりを大事にした社会を築いていくのが本当に大切でしょう。

偉そうなことを言いましたが、何を為すべきかを日々考えながら、こういう機会にいろいろな考え、見聞を広めながら、もう少し頑張っ歩いていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

(米原) 田中先生、ありがとうございました。「巨大地震の贈り物」という最終の先生の言葉で結んでおられるような気がします。この点については、後ほど、まとめのところでもご意見をお聞きしたいと思います。

続きまして、布村先生の方からご提案をいただきたいと思います。布村先生は、富山で海のことについていろいろ詳しくご研究されておられます。今日のお話は「富山の自然、海、川、里」といったものを踏まえながら、最後はその中で育ったわれわれ県民はどんな気持ちになっているのかという県民性のようなものに触れていただければと思います。よろしくをお願いします。

## 報告 2 「特に富山湾と富山県の特徴ある自然について」

布村 昇 氏（前富山県生物学会 会長）



### はじめに

私は生き物の話についてはしばしばお話ししていますが、「自然観」という領域についてお話しするのは初めてで、荷が重いのですが、私の乏しい経験から気の付いたこととお話ししたいと思います。

私は富山で生まれ、高校時代までを過ごしました。毎年 11 月の末ごろから鉛色の空続き、雪が降ると雪かきが必須で。そして子供ながらに「春になるのはいつなのかな」「春になったら早く魚捕りをしたい」と思いながら過ごし、時には「人間はいつか死ぬのだな」なんてことを考えながら育ちました。

大学時代から 20 代は関西地方で過ごしましたが、特に和歌山の南に居るときは、冬になってもいつの間にか寒くなっている、いつも山は緑色、海は青く、富山の白か無彩色の冬と鮮やかな春、夏、秋の対比というのとはずいぶん違うと感じました。30 代から再び、富山の生活に戻り、あらためて風土の違いを感じ、人間の考え方に自然が影響を与えるのではないかなと思った次第です。

さて、先ほど山折先生が、「たぐいまれな日本の山・森・海」というお話をされましたが、富山県は特に独自性が顕著ではないかと思っています。富山の自然の特徴を順番を眺めなおしてみましょう。

## 1. 富山の自然の特徴、独自性

いろいろな人が富山の自然の美しさや大きさに触れています。ご存じのように、大伴家持が有名な詩を詠み、室鳩巢が「越中百里、山河壮ナリ」という有名な言葉を残しています。この特徴的な美しくすごい自然を作り上げている最大の特徴は大きな標高差とたくさんの積雪ではないかと思います。

日本付近の地図をみると地球上での大陸と海の位置関係がその土地の気候に大きな影響を持ちます。大陸の冷たい高気圧から季節風が吹いてきます。日本海南部を流れる対馬暖流から蒸発するたくさんの水蒸気を吸って、その季節風が立山などの山岳にぶつかり、大雪を降らせます。雪は固体の形の水でずっと夏まで保たれ、少しずつ解けますので、その水は生命を育み、資源としても大きな恩恵をもたらします。海や高い山がこのように配置していなければ、この自然はなかったはずで、地球上の配置が富山の気候に大変大きな影響を及ぼしています。また、標高差が大きいので、標高に応じた多様な自然があります。

## 2. 富山の海

まず海は、「海岸」と「沖合」と「深海」に分けて考えたいと思います。富山湾の海岸は、残念ながら、生き物が大変少ない寂しいもので、富山の生き物の種類の数は貝でみると、和歌山県の5分の1くらいしかありません。これは潮の満ち引きがきわめて少ないこと、冬季に海の面が低下すること、磯が少なく、干潟が無いことが大きく影響し、さらに多数の河川が雪解け水を運んできて、富山湾岸の塩分が低いということが関係しています。

太平洋側の場合、満月や新月の日の昼ごろに大きく潮が引きますので、みんな海に行って潮干狩りをしたり、子供が磯遊びをしたりするのですが、日本側ではその体験がほとんどできません。ですから、海岸に直接体を置く機会がなかなかないかと思っています。私自身は母の実家が東京でしたので、当時の東京湾に行って潮干狩りをして、磯遊びをして、何と面白いことがあるのだろうと思い、最後は海洋生物の方へ進みました。

富山湾の沖合に目を転じますと対馬暖流が流れており、暖流系の魚が捕れます。定置網漁が発達しています。魚屋さんが非常に多く新鮮で、シラエビ、ホタルイカ、カガバイなどユニークなものも見られます。富山の人はタンパク質を海の資源からとることが多く、海への依存が非常に大きいといえます。また、歴史的にも海運など経済活動への海の役割は大きいものです。

次に富山湾の300m以上深い所はほとんど水温が0℃で、深層水とか、日本海固有冷水塊

とかとされています。1000m を越す湾は、日本では太平洋側の駿河湾、相模湾と日本海側では唯一の富山湾しかありません。ほとんど 0℃ですので、古くは深い所の生き物を捕る技術がなかったのですが、バイ類を取るための「ばいかご」などは吉宗の時代から始まったとされています。一方、ベニズワイなどは新しいものです。ただ、このようなものがたくさん捕れる、とても珍しい生き物が捕れる所で富山湾の大きな特徴だと思います。

## 富山湾の深海

- ◎ 日本海固有冷水塊(深層水)。
- ◎ 1000mを越し、ほとんど0℃
- ◎ 地球の歴史としてはきわめて新しく、氷期に内陸湖化と北方冷水系生物が植民した。
- ◎ 美味で「独特な」水産物が存在する。



### 3. 富山の高山

一方、高山地帯があるのが、富山の特徴です。高山地帯は温度が低く、たくさんの雪が積もります。さらに、立山の山岳地帯には、最近発見された氷河や、昔の氷河跡であるカール地形があります。また、高山独特の生き物がおり、ライチョウやチョウノスケソウなど、1 万年前まで続いた氷河時代の生き残り(遺存)といわれるものがあります。また、山の風景は近くへ行ってもすごいです、遠くから見てもすごいもので、その神々しさから信仰心が富山の人々に根付いたのではないかと思います。私自身も子供のときから、「立山には極楽も地獄もあるよ」ということを祖母から聞いて育ちました。

### 4. 富山の森

富山は豊かな森に広く被われています。コナラ、ミズナラ、ブナなどの広葉樹やスギの植林地も多くあります。森は空気をきれいにし、水を貯めて洪水や渇水を防ぐのに不可欠

です。高山地帯でなくとも、一歩森に入りますと、雪に関係したものがたくさん見られます。陸貝で、日本で一番大きな種類は富山県にもいるクロイワマイマイです。陸貝は本来海にいる巻貝が陸上に進出してきたもので、大型種は特に乾燥に適応するか湿潤な環境に住むことが必要ですが、富山の山地は雪による湿り気が保たれ、最大の種類が生きることができると考えられます。また、本来海にいるフナムシに似たヒメフナムシが富山県の山にはたくさんいますが同様な多雪による湿潤な環境の多さが関係しています。植物では、葉が大きくなるものや雪の重みで木の幹が曲がるなどの現象がみられます。

また、山の幸や地下資源の恩恵も受けてきたのですが、反面、富山県の山はあまりに陰し過ぎて気軽にハイキングなどでは行きにくい面があると思います。

さらに、忘れてならない富山のよさの一つは水がおいしいことです。これも豊かな森が支えています。ただ、全国的に森がだんだん管理する人間が居なくなってきた、放置されてきています。近年はきれいな水を取るために日本の森を買ってしまおうという外国の動きがみられます。きれいな森が保たれてきた日本、特に富山県は良い水を飲めるのですが、おろかな政策を採ると、いつかそれが全部無くなってしまい、はげ山になって、水もまずく飲めないということになる恐れがあります。長期的な視点に立って、いろいろなことを考えていかなければならないと思います。

## 5. 富山の川

高い山が海岸に近い場所にあれば、川は当然急流になります。社会科の教科書には河川の勾配図が載っています。常願寺川や黒部川は、一級河川では最も急流の河川です。急流の河川の水はとてもきれいで、汚染はほとんどありません。反面、海と川の水が交わる汽水域、あるいは下流域と言われる場所がほとんどありません。また、下新川郡の方に行きますと、上流のまま海に突っ込んでいると感じの川がほとんどです。従って、富山県の川は大変きれいですが、生き物の種類数は少ないです。きれいな水で美味しい魚、アユやマスなどの漁が行われていました。古くは大伴家持の時代からアユやフナを捕ったなどいろいろあります。江戸時代には鮎寿司が献上されており、今は鱒寿司が主流になりました。

また、本来海の生物が川に封入されてしまって川だけに住むようになった陸封種とわれるものがあります。たとえばヤマメはサクラマスと同じ種類の陸封種といえます。氷河時代に淡水湖に近い状態であって日本海で淡水に適応したものの、その後の海進で陸封したのかもしれない。

たくさんの急流な川が流れているということは、川の水が伏流水となって地面をもぐって行ってわき水として出てくるということがあります。わき水というのは、地下を通っていますので大変きれいな水になります。しかも、1年中、温度がほとんど一定というのが特徴です。富山県の川のわき水は多くて、それを水道としている所も結構たくさんあります。湧水は年中水温が一定で30年ほど前は13.5℃くらいの水だと言われていましたが、最近では14℃を超しているようです。そうすると、ここにも変わった生き物が見られます。トミヨという魚は北極の周りにだけ住んでいますが、富山県では各所でと見られます。ヨコエビやスナヤツメなどが湧水で見られます。

川と人との関わりがたくさんあります。富山県が石川県から独立した大きな原因も水との闘いの問題でした。また、今は国際語となっている「SABO」という言葉も、常願寺川の砂防から出たと言われてはいますが、大変多くの犠牲を伴って水と闘ってきました。そして、多くの雪解け水を飲み水としてはもちろん、農業用水として田んぼに引き入れて、水田地帯を作ってきました。春になると、上から見るとまるで海のように全部水で覆われた世界になります。一方、工業用水としても使用され、特に、川の落差からくる位置エネルギーを利用して水力発電も行い、その発電を利用してアルミ工業などの産業も盛んになり、電車なども大変発達させてきました。

## 6. 富山の里

人々の主な生活の舞台となって居るのは平野です。富山の里は典型的な水田単作地帯です。水田は水を貯め調節するとともに、多くの生物を養い、気候をマイルドにします。水田の多さは富山の自然環境の良さとして欠くことができません。

特に今では少なくなりましたが、屋敷林です。カイニューやカイニョと言っている所がありますが、少し小高くなって水がつきにくい所に家ができ、木々で覆うので散村の形態となっています。

## 富山の里

- 豊富な雪解け水→水田単作地帯
- 用水排水の発達と少ない溜池
- 散村の形態



昔の人は里山やそれに準ずる環境との関わりが随分濃厚でした。そして、生活に必要な燃料や食べ物、薬、道具なども自分で作っており、生活の知恵や工夫がみられました。最近はより快適でより便利な生活ということで、そういったものはだんだん忘れられて里山は荒れてきました。スーパーに行けばいろいろなものが食べられて、水一つにしても昔のように重労働の水くみに行かなくても水道の蛇口をひねれすぐに水が出るというように、ライフスタイルが大きく変わってしまったと言えます。

里の周りには用水が発達していて、子供たち、特に男の子は、春になると魚や虫を捕りにいたりして、日暮れまで野外で遊んでいました。最近はそのようなこともできなくなりました。かつての小川も三面コンクリート張りになってしまいました。近づいてはいけな場所になりました。水との距離が遠くなりました。われわれが子供のころは、水の冷たさだのの体験や、危険な生き物などの知識がありましたが、今はできなくなってしまいました。それで、今は無理に親水空間を作り出すため幾つかの場所を指定して、特別の予算をかけた工事が行われるようになりました。

しかし、一昔前、小川に普通にいたフナやナマズ、ドジョウ、マルタニシ、チスイビルなどはほとんどいなくなりました。その代わりに、高速で泳げる魚やアメリカザリガニ。タイワンシジミなどの外来の生物が増えてきたりしています。川は自然の変化が一番著しい所です。陸や海のように面ではなくて、ほとんど線で環境の変化の影響を強く受けるの



が川の自然の特性と思います。

## 7. 富山の人の“県民性”と富山の自然

以上、非常に大雑把に富山県の自然の特徴を見てきたわけですが、それらを踏まえ、富山の県民性に反映しているのかということを考えてみたいと思います。

『人国記』には、「越中の風俗、陰気の内には智あり、勇ありは佞なるところ多し」と書かれています。あるいは「忍耐強い、無駄遣いをしない」といった統計がずっと取られてきていますが、最近は、そういう傾向も薄れつつあるものの、まだかなり残っていると思います。もちろん、県民性の醸成には歴史的、地理的、社会的な要因が大きいと思いますが、自的要因も結構大きく影響していると思います。その中で洪水をはじめとする度重なる災害をこうむっては立ち上がってきた経験が最も大きいのでしょうか、冬季の鉛色の空と無彩色の風景をはじめ、雪の付き合いが随分重要と思われる。子供のころから雪で遊び、雪道を歩き、雪の冷たさと重さを我慢してきたということも、大きな影響があると思います。また、雪の恩恵、逆にまた雪解け水の影響といったものはついつい忘れがちですが大きなものと思います。

もちろん、立山など秀麗な自然の風景が県民の心に大きな励ましていると思います。私には立山の姿だけでなく東側に連山があることが心に刷り込まれているようで、京都時代は東山、和歌山時代は熊野とか、大阪時代は生駒山脈と東側の連山にめぐまれ何か安心するのですが、東京に行って東側に山がないと何となく不安だという癖もあります。

最後にこの個性豊かで美しい自然を将来まで守っていかなければいけません。また、富山の自然の独自性を大切にしながら、長期的な視点に立って、特に目先のことだけでなく、総合的に長期的に考えていかなければならないのではないかと考えています。大急ぎでしたが、発表を終わらせていただきます。

(米原) 布村先生、ありがとうございました。短い時間で富山を一気に展望していただいたような形です。その中で最後は、やはり快適性がもたらす課題ということと、高い山や海の中での清冽さといいますか、こういったものが県民の美意識の醸成ということになる。これが後に文化を生み出す背景になるというお話でした。

では、続きまして、佐伯先生によるしくお願いしたいと思います。民俗学の方で、象徴

的な一つの形態を意識の中でどう変化されていくかという話になります。方言の問題などにも触れていただければありがたいと思います。

### 報告3 「富山民俗にみる森里海の自然風土」

佐伯 安一 氏（富山民俗の会 代表）

佐伯でございます。私が最初、興味を持っていたのは方言でしたが、方言をやっているうちに、言葉というのは、その背景にある暮らしの実態をよく分かっていないと深い説明はできないということに気づき、民俗という学問に移ったわけです。



民俗学といいますのは、自分たちの暮らしているいろいろな事象がどういう意味を持っているのか、あるいはどういう変化をして今日になったのかということ調べる学問です。例えば家の間取りが全国各地でどう違うのか、その中で富山県の私たちが住んでいる間取りはどういう位置にあるのかということいろいろ考えてきたわけです。私は最初、自分の暮らしていること自体が学問の対象になるということに非常に感動して、この道を歩いてきたわけです。柳田国男の民間伝承の会に入会したのが、昭和21年です。それが後に日本民俗学会に変わってきました。

#### 1. 緑の三角帽子ー五箇山のオーバエ(雪持林)

今日は「森、里、海」というテーマですので、そういう中で山の森のお話をしてみようかなと思います。

最初に世界遺産になっている五箇山の相倉（あいのくら）と菅沼という集落がありますが、菅沼の集落の調査をかなりやりました。菅沼の集落は後ろの山にオーバエという森を持っております。



映像は元の上平村の小学校があった皆葎（かいむくら）の集落です。下の方に皆葎の集落があり、ここでもその上にオーバエという森を持っております。オーバエというのは、雪持林、雪崩が集落に押し寄せないようにというためのものですが、一方では、水持林として水源を涵養する役目も持っています。

こうして見ますと、オーバエの緑が非常にきれいです。時期はゴールデンウィークのころです。4月終わりから5月初めです。オーバエの木は、ブナやトチが多いです。その周りの木はナラ系の自然林で、ミズナラやコナラといった木です。ブナの木というのは新緑が出るのが早いので、ちょうどゴールデンウィークのころに、きれいな緑になります。背景はまだ冬の姿のままの灰色です。そうすると、オーバエの緑の三角が際立って見えます。私たちは、それを「緑の三角帽子」と呼んでいます。庄川の兩岸の集落は山麓にありますので、こういう集落がずっと並ぶわけです。

次の映像は菅沼の春です。前を庄川が流れており、集落が川の縁の台地にあります。その背景、国道156の上の方ですが、そこに三角帽子があるわけです。菅沼の場合は、ブナ林にトチが少し混ざっています。夏になりますと、まわりのナラ林も緑になってきますので、三角帽子は同色になってしまいます。秋になりますと、紅葉してまいりまして、ブナ林はかなり紅葉してきます。そして冬を迎えるわけです。冬になりますと、雪景色になります。



オーバエといいますのは、雪持林のために植えているのですが、水源を涵養する役もあります。周りはみんな村の共有林で、そこでは燃料の柴を茹ります。薪は秋に刈っておき、雪が降って、今ごろからもう少し後、雪が固くなってくる3月くらいにそりで下ろすわけです。それを「春木」と言っていますが、そんなふうには山の人には利用しているわけです。

下梨の向かいに大島という集落がありますが、ここの雪持林は山の高い所にあり、その途中の斜面に畑をしています。また、「なぎ」と言って山を焼いて、カブラやソバ、ヒエといったものを3年ほど連続して作る「なぎ畑」にしたりしています。

また、クワラといひまして、蚕を飼うための桑を植えています。その桑を山の斜面に植えている所もあります。そのように山の斜面を土地の地形や日の当たり具合など細かいところまで考えて土質に合った使い方をしているわけです。

また、「ホリキリ」といって山の斜面を階段状に削って、雪崩を起こさないような仕事もします。そういうのも村の共同仕事でやっているわけです。

また、冬になって、雪が一晩に1mも積もりますと、雪庇と言って雪の軒先みたいなものが出てきます。これが崩れるとアワという表層雪崩起こって怖いものですから、それを落とすに行く仕事があります。そういうときは、普通、村仕事（惣普請）は、1軒に1人出ますが、雪庇を落とすのを「冬風落とし」と言っていますが、これはかなり労力が要りますので、1軒に1人ではなく、家にいる男は全部出るということになっています。それを「男頭（おとこがしら）が全部出る」という表現をしています。このように、村の人たちは共同で村仕事として雪持林を守っているわけです。

次の映像は西赤尾から対岸の村を見たところです。これは西赤尾のダムですが、その向こうの方に各集落の緑の三角帽子が見えます。これが東赤尾でしょうか。それから、ここが新屋（あたらしや）です。向こうの方に中田、田下（たのした）とその辺の村があります。撮影場所は、赤尾のスキー場の山頂で、対岸の各集落の緑の三角帽子が見える場所です。撮影したのは南砺市職員の下崎美磨さんです。



南砺市の井口に赤祖父山というのがあり、赤祖父ため池というのがあります。ここもブナの110町歩ほどの共有林です。ここは「切らずの森」ということで、何百年か切らずにきている自然林です。ブナは広葉樹で、夏は緑で、秋冬になると葉っぱがみんな落ちます。落ちた葉っぱが50cm、1m積もっている所もあり、そこで水を保っているわけです。自然のダムのようになっていますが、それが雪解けから夏までの間に徐々に水を流してくれるのです。ここは赤祖父水郷という山麓の12か村の共有山になっており、赤祖父ため池というのが戦争末期に造られ、それがいまでも大事な農業用水、生活用水になっているのです。

## 2. 山の森の記憶を持って平野へ — 散村のカイニョ (屋敷林)

このように、山村の生活は森のおかげで生きているのです。近ごろは山の人もだんだん山に入らなくなり、家のある所だけが自分の村のようになっていますが、本来は背後の山を含めて、それが村なのです。ですから、世界遺産になった相倉にしても菅沼にしても、家のある所だけでなく、背後の共有山も含めて指定になっているのです。



もう一つ申し上げたいのが、砺波平野の散村です。富山県というのは、平野部は中世末から近世はじめ、16～17世紀くらいに開拓が進みました。そこがみんな散村になっているわけです。散村といいますと、砺波平野と黒部川扇状地ですが、常願寺川の両岸でも、例えば立山町の高原野や左岸では元富南村と言っていた辺りに非常にきれいな散居村が残っています。散村の民家はカイニョ（屋敷林）に包まれています。

カイニョというのは、山麓の方から出てきた人たちが平野を開いたときに山の森の記憶を持っていて、家を建てたときにも森を造ったのではないかと思います。カイニョは一義的には防風林ですが、その根っこに山に居たときの記憶がある。森というのは、母親の胎内のように安心感のあるスペースなのです。そういうのを再現したのがカイニョではないかと考えているわけです。

（米原） 佐伯先生、ありがとうございました。

## ディスカッション

（米原） 富山の特色ある自然ということで、幾つかご提示いただきました。最後に言い

たいことがまたあると思いますので、その辺またよろしく申し上げます。そして、今ほど暮らしの実態を知ることが民俗であるという観点からお話をいただきました。このお三方のご意見を踏まえながら、次のステップに移りたいと思います。

テーマは、「自然観から捉える、森・里・海」というわけなのですが、言葉からいいますとキーワードは「自然観」ということになります。実は、前に木崎さと子先生もこのシンポでもお話しになったということですが、いろいろなことをお聞きしましたら「森の民」という言葉を使っておられます。「生きとし生けるもの、宇宙のあらゆるもの、これは太陽を含めるのだ。それが永劫の再生と循環を繰り返す」というふうにおっしゃっておられます。そういう意味では、自然観は世界観であるとも思いますし、太陽までいったらやっぱり宇宙観ではないかと思います。そういう人たちの考え方の中で、先ほど佐伯先生がお話しされた、いろいろな生活の知恵が積み重なって現在のわれわれに引き継がれている。これが少し由々しき問題になっているということなのですが、田中先生に少しお伺いしたと思います。先生の方で自然観を先ほど少しお出しいただきましたが、森の民とか自然観とか、あるいは豊かさという言葉をもし使うならば、そこら辺、先生はどんなふうにお考えいただくのでしょうか。

### 森のハイパーソニック環境音もたらす癒しの効果

(田中) 私は、現役時代の大半は海の生き物の研究ばかりで、森の方に関心を持ったのはこの10年ぐらいなのですが、自然観を考えたり、森の価値を見直す際に、非常に重要な素晴らしい研究が日本人(大橋 力:音と文明、2003)によってなされていることを知りました。皆さんの明日からの暮らしにもきっと役に立つと思います。

私たちは自然の素晴らしい力を本当にまだほんの少ししか知らないように思います。その間にもどんどん自然が崩れていっている(崩れている)と言えます。森のその典型事例が音なのです。皆さんの中にはひょっとしたら聞かれたことがあるかもしれないのですが、私がこんなふうに話している、あるいは都会の中の喧騒(けんそう)の中の音というのは、20kHz(2万Hz)以下なのですね。それより周波数の低い音は耳で聞くことができます。しかし、自然環境の中にはそれよりはるかに高周波の環境音がいっぱいあるのです。それは専門用語的にはハイパーソニック・サウンドと呼ばれます。ハイパーというのは何々より高いとか長いとかいう意味で、サウンドは音ですね。

ハイパーソニック環境音が最も典型的に測定されているのが熱帯雨林なのです。普通は



20khz までですが、熱帯雨林には 130khz、もっと先端的な測器が開発されればさらに高周波の音が記録されるでしょう。それからモンゴルの大草原や身近な所では里山、今日も何回も話が出た屋敷林、京都ですと鎮守の森、こういった所に存在するのです。耳からは聞こえないのですが、脳（脳幹）はきちんとそれを感知しています。それがどういう効果をもたらすかと言いますと、ストレス状態を確実に低下させるとともに、免疫機能に関わる細胞を増殖させる、つまり、免疫機能を高めるわけです。

最近、このことは医学的にも注目されています。皆さんはお忙しいでしょうからなかなか森へ出かけるような機会はないのかもしれませんが、3～4 週間に 1 日だけでもそういう森の中でリラックスして過ごされると、“ハイパーソニック・エフェクト” が生まれ、それは結構長く持続することが実証されています。技術的にはそういうハイパーソニック・サウンドを流すオルゴールのようなものが今開発されていますから、もしそれを身の回りに置いておけば、森に行くのを代行するような機能を発揮する可能性があるかと期待されます。そのようになれば、薬やお医者さんに頼らなくても健康になれる、そういう存在が森の中にあるのです。昔の人たちはそんなことは科学的に明らかにされていなかったでしょうけれど、きっとそれに類することは体感されて、屋敷林を造り、鎮守の森をしっかりと守るということがずっと続いてきたのでしょう。それも先人の知恵だと思います。

面白いことには、近くの森に行く場合にも、森を選ばないと駄目なのです。スギヒノキの人工林、生き物の気配が全くないような森にはそれは存在しないのです。ですから、自然観は、文化的な側面と同時に、そういう自然が持っている私たちの人知を超えた素晴らしい力にやっぱり依拠するのだらうと思います。そんな自然の素晴らしい力が明らかになる前にどんどん壊されていっているということに、本当にそれでいいのだろうか。私はあと 10 年、長く見積もっても 20 年の命だからいいでしょうが。私たちの孫やその次の世代のために今本当にやらなければならないことはいっぱいあるのではないのでしょうか。公共事業もいいでしょうが、それは自然にこれ以上の負荷をかけるのではなく、自然を再生するような公共事業をやってほしいと思います。こんなことも含めて、私は今自然観をその再生につながる視点より、考え始めているところです。

**（米原）** ありがとうございます。今まで森の中では、例えばフィトンチッドみたいなものはあるように感じていましたが、音について触れられたのは初めてお聞きしました。音というと、もちろん非常にハイパーソニックですから感知しない、気付かないのですが、

それがすごく今の癒しというものにも大きく関わってくる。そういう自然の再生が望ましいというお話でありました。

(田中) 少しだけ言い落としたのですが、バイオリンやピアノなどにはその音は出ないのですが、尺八や琴、インドネシアのガムランの打楽器、自然の素材で作った楽器からは出るらしいのです。私の研究フィールドの干潟のように多様な底生動物がいろいろな音を出し、それらを求めて多くの水鳥が集まり、満ちては引く潮の音や風に引き起こされる波の音が満ち溢れるような自然環境にも必ずそのような音が存在すると思います。当然、自然豊かな川の周辺にもそのような音は存在し、豊かな森が豊かな海を育む「森は海の恋人」舞台には、森と海をつなぐ川を含めてハイパーソニック・サウンドの世界が連鎖しているように感じています。

(米原) では、布村先生。今のお話を聞かれながら、先生がいわゆる富山湾をイメージした中での自然観を先ほど少しお話しされましたよね。田中先生のお話にありましたが、「森は海の恋人」という言葉がありました。逆の言葉は成り立つのでしょうかね。海は森の恋人、つまり、連環の世界と自然観がつながっているような気がしますけれども。

### 守らなければならない自然の連環

(布村) 地球上のあらゆる物体には重力がはたらくものですから、上から下へという流れが圧倒的なのですけれども、海から山への物質、エネルギーの流れもあります。海の水蒸気が山へ行くというものが一番大きいと思います。そのほかにも海から川へ回遊する魚などが結構います。マスとかアユとかカニです。そういう動物が海のいろいろな状況を川へ伝えていきます。もっとも、ダムなどか何かあるとそれが妨げられます。

水中の川から陸上の森へというのはなかなか難しいです。たくさん水生昆虫が羽化して陸上へあがりますが、これは川のいろいろな汚れなどを食べた水生昆虫が羽化して物質を水中から陸上へ動かします。昆虫は小型ですが多数居るので非常に大事な意味を持っています。また水鳥が魚を食べ、糞をすることや、クマなどの哺乳類がサケなどの魚を食べ、糞をし、食べ残しを捨てることも多くの陸上生物を養っています。ヒトによる漁獲物の食べかすも大きいでしょう。なお、すべての動植物は海洋起源ですので、その影響は濃厚です。例えば私たちの体の細胞の周りの環境も海水の成分とよく似ています。

## 物資と文化が交流した越中と飛騨・信州

(佐伯) 今、海から山へという話がありましたが、そういう視点で言いますと、よく出てくる「ブリの道」ですね。海で捕れた魚が山村へ行く。越中で捕れたブリが高山へ行って、それが「飛騨ブリ」という名前で信州へ行ってお正月料理になっているというようなブリの道、魚の道があります。それから、人間が生きていく上で一番大事な塩があります。「塩の道」というのがやっぱり庄川沿い、神通川沿い、あるいは新潟ですと糸魚川から姫川沿いに信州松本へ入っていく。そういう塩の道がございます。

それから、米も山村ではヒエとかアワとか、そういう雑穀を食べて生活をしておりますので、米を非常に望むわけです。それで、米がまた平野から山村の方へ運ばれていく。そういう中で、物資だけでなしに文化も山へ行く。あるいは、山村の生産物を平野、海の方へ持ってくるために、山の文化が平野、海の方へ出てくる。そういう文化の交流というのもそれと一緒に行われている。そんなことで、飛騨などはまさに越中と非常に深い関係があります。神通川沿い、庄川沿いで昔から非常につながりを持った地域の文化圏ができているという面もあると思います。

(米原) 自然科学的に見ると、海から山へというのはなかなか難しい問題があるのだけれど、文化から見たらそれは非常に容易であるというお話でした。特に、飛騨の方は山がちですから、やはり米を含めた食料品が非常に不足しています。日用品も不足している。それをほとんど越中から飛騨に上って、飛騨から信州へ行くという交流があるわけですね。そういう意味では、海、山、あるいは里、川という言葉で自然科学的なもので捉えると同時に、文化交流も合わせて総合的に捉えると、それが先ほど田中先生がおっしゃった総合的な研究ということになるのではないかと今思ったわけです。

佐伯先生、少し補足的なのですが、先ほど雪のお話がありました。田中先生からも、雪は県民性をはぐくんだというお話がありました。そういう点で、雪と民俗について少しだけ触れていただければありがたいのですが。

## 雪と関係した富山の民俗

(佐伯) 私のレジュメの3に「雪の記憶」ということを少し書いてみました。記憶といえますと、私どもは三八豪雪、五六豪雪というのを近年一番身近に考えております。それ

から、雪が降りますと「アワ」という表層雪崩がございます。幾つもありますが、大きいのは昭和15年の1月28日ですから、今ごろですが、上平の漆谷という集落でアワが outcome して、小さい村でありますが家屋が5戸倒壊しまして、死者が13人も出ているのです。そういうのがございました。それから、三八豪雪の翌年昭和39年には、山にたまった水のために、氷見の胡桃では地滑りがございました。70haほどの土地が動いたわけで、87戸の家が壊れております。それがわずか3時間ぐらいでそういう被害になったわけですね。

ですけれども、雪に対しては雪国の者は非常にいろいろな対応の仕方を持っております。冬になりますとまず歩く道を確認するために道踏みというのをやります。道を除雪するのではなしに、今は機械、水で雪を排雪していますけれども、昔は雪を踏み固めて歩く道にしていたわけです。五箇山なんかでは「道踏みの札」という当番札があります。そこには「雪が1尺以上降ったら道をあけてください」と書いてあるのです。雪が降ると村の中の道を踏みます。たくさん降ったら2軒か3軒まどまってやります。そういう道踏みの札という当番札が順番に村を回っているわけです。

それから、雪といいますと越冬食品が考えられます。富山県は、昔は4~5カ月雪の下になるわけですから、その冬の間を食品を確認しておかなければならない。例えば、大根の干したもの、ナスビの干したもの、いろいろありますが、そういう干すということ。あるいは、漬ける。塩漬けや味噌漬けなどの漬物にする。それから、「活ける」と言ひまして、軒下に土を盛りまして、そこへ大根やネギとかニンジンとかを土の中へ入れて保存する。それから、いろいろないわゆるふるさと料理みたいなものもたくさんございますが、そういうものが雪国では非常に進んでいるということです。

それから、雪は災害ばかりではなしに、非常にいい面も持っている。例えば、東海道の方の汽車に乗っておりますと屋根瓦は非常に汚いですね。何かセメント瓦の、こけこけになったようなのが、ずーっとあって、どうしてこんなに汚いのだろうと。ところが、雪国の私どもの瓦屋根といいますのは黒光りした非常にきれいな屋根になっている。雪なり雨なりが掃除してくれるわけですね。それから、山菜、ゼンマイとかワラビなんかでも、太平洋側の雪のない地帯の山菜は何かバサバサしているのです。それで向こうの人がこっちへ来てワラビとかゼンマイを食べると、何とみずみずしいのだろうとびっくりするような、そういういい面もございます。

もう一つ、私はつくづく思うのですが、こういう雪の季節というのは思索の季節だと。ゆっくりものを考える季節だと思うのですね。そういう面で、雪というものは決してマイ

ナス面ばかりではなく、いいところもいっぱい持っていると思うのです。

(米原) 雪というのは富山県では切っても切れないものです。ただ最近では、暖かい冬と言いますが、今年は結構12月の半ばごろから雪がありました。最近、雪は邪魔者だという思いもあるのですが、半分ぐらいはそれによってもたらされた効果も大きいということを感じていただければ非常にありがたいと思います。

特に真宗王国ですから、「おかげさま」という言葉は雪から生まれた言葉ではないかと。三八豪雪の時に、もう道が雪に埋もれて屋根の近くの細い道を歩いていくということがありました。そうすると向こうから年配の方がおいでになると、自然に子供はその道をあけて横へ下がるのです。ずぼっと足がこけて下へ入ってしまうのですけれど、そうすると年配の方が「僕、ありがとう」と言われたら、何かいいことをしたような気もする。その中でお互いに雪の中での心の使い方を学ぶというのが富山県民の一つの世界でもあったのかなと。それを今まとめておっしゃっていただいたのが佐伯先生のお話ではないかと思えます。

#### 里海は存在するか

(米原) そろそろまとめの方にもなるわけですが、布村先生、里山というのは結構最近話題になっていますね。クマが出たという問題ですが。里山の問題と、里山というのは山と森との間の一つの境界域です。とすると、海と野の境界域というのはあるものですか。里山ではなくて里海というのはあるのですかとお聞きしたかったのです。どうでしょうか。



(布村) 海と陸は全く異なる世界なので、海と里の物理的な境というのは具体的には思いつきません。自然の海と養殖場所や様々な人工海岸など人間の営為の及んだ海との関係という意味では人為の影響による富栄養化や水流の変化などの影響を考える必要があります。ただ、富山県の場合、非常に急深な所が多く、浅い海はほとんどなくて大規模なものは考えにくいと思います。特に東側の新潟県境などは、石を転がすとコロコロと転がって

いくような急深の海でなかなかそういう概念がなじみにくい面があります。

(田中) 里というのは英語でも sato として認知されていますね。里山もそうですが、里海もそれに近い状態になりつつあるようです。発想は、人が適度に自然に手を加えながら共存していくというのが里山なのですが、それと同じ発想で、海もやっぱり海藻が生い茂ったらそれを間引いてうまく肥料に利用したり、間伐材を用いて木製の人工漁礁を設置して魚介類を取ったり、カキがらを用いて干潟環境を改善して貝類を増やしたり、いろいろな工夫を加えながら海と共存していくということです。里山はもちろん日本からの発想ですが、その里山の海辺番が里海です。森が海に迫る地域では里山と里海がセットになって森と海をつなげるという展開が、瀬戸内海や英虞湾辺りで実証的な取り組みが進められてきているようです。我が国には、古来“魚付き林”という考えがあり、海辺の森を保全すると、その周辺には魚介類が集まり、漁業が持続的に営まれるとの経験則（先人の知恵）です。里山・里海の原点的な知恵のように思います。

#### 次世代に残すべきものは何か

(米原) 私も前から疑問に思っていて、もう少し聞いてみたいことがあります。時間の関係で先の方へ進めていきたいと思えます。この後まとめということで、先生方から今危機に直面した問題についてのご提言を少しいただきたいと思うのです。今、里山の問題が出ました。河川の問題も出ましたね、コンクリートの問題。それから、都市化への生活の傾斜という、これも結構大きな問題ではないかと思えます。なかなか地域・地方へ目配りができない。都会への憧れも含めていくと、だんだん心も体も自然から遠のいていくという感じがあります。そういう点では、先ほども出ましたが、体験学習というのも非常に大きな意味を持っているのではないかと思えます。このような時代において、次世代に何を残すか。形ともう一つは心というのがあるのではないかと思うのです。こういうものをどう残していくのか。その方法論なり、提案・提言をまたお願いしたいと思えます。

実は、先ほどご講演いただいた山折先生の言葉ですが、「日本の心」という言葉と「日本人の心」という言葉をお使いになっておられるわけです。日本の心とは何かというと、心をはぐくむ土壌、あるいは背景を風土とおっしゃっておられました。風土を生かして知恵を出して生活文化を営んでいくのが日本人の心だと。そのようなものはやっぱり残していくべきものではないかと思えますが、これについて順番に田中先生、布村先生、佐伯先生

と、ご提案、ご提言、何かまとめ的なものでお話し願いたいと思います。

(田中) 基調講演の中で山折先生も最初におっしゃいましたように、日本は本当に稀に見る森の大国あり、海の大国なのです。そして、森と海とをつなぐ結節点になるのが河口域や干潟や、それからもうほとんどなくしてしまった湿地帯なのです。そういう所は埋め立てて農地にしたり宅地にしたりして、本来はそこまで人が侵食しなくてもいい、聖域に残しておくべき所を全部つぶしてきました。今回の東北太平洋沿岸を直撃した巨大な地震と津波では、圧倒的にそういう所が甚大な被害を受けたわけです。しかも同時に、先ほど少し申し上げましたように、気仙沼では70cm、そのほかの各地でも30~40cmから70~80cmの地盤が沈下して、多くの地域で海水が入って元の海に返ろうとしているわけです。それは、地震や津波がこの半世紀以上にわたる人間の経済成長最優先や目先の暮らしの利便性追求のために自然を壊し続けてきたことに対して、「それで本当にいいのか？」を考え直す自然の贈り物に違いありません。そのことの意味を十分考え、次世代へ贈り物として扱うことが大事だと思います。そのような場所は子供たちが安心して、海や、それから森と海をつなぐを学ぶ境界域での、格好の環境学習の場になると思います。

気仙沼の私たちが取り組んでいる所では、そのような海に戻った場所に早くもアサリ稚貝が現れ出しました。これは面白いというので、NPO 法人森は海の恋人は市の教育委員会と連携をして、いろいろな小学校から子供たちを受け入れ、そこでアサリを捕まえて、どれぐらいの面積にどれぐらいの大きさのアサリが何個いるかをきちんと測るわけです。子供たちは最初のうちは恐る恐るやっていますのですが、終わりのころには暖かい時期だったら水にまみれて走り回って楽しむということになります。こういうことをもっと組織的に進めていく必要があるのではないかと考えています。

そして、それは何も子供たちだけに意味があることではなく、地域の人たちが、干潟が再生してそこにアサリが現れていることに、その昔、自分たちが若いころ、そこは海でありアサリを朝げ夕げに食べていた日々を思い起こすことにもなりました。これはやっぱりもう埋め立てないで、そういう環境教育の場として大事にし、その中にシニアが貢献できるような分野もたくさんあるとの思いに至ります。シニアの皆さんはいろいろな経験を持っておられるから、それらを孫たちに伝えていく役割もあるとの思いに至ります。さらに、自然がもとに戻る過程をしっかりと研究し、その意義を解明していく場所にしようとの方向に向かうことになりました。震災を乗り越えてどうやって生きていこうか模索する地域の

人たちが、アサリの大発生や生き物たちのたくましさに刺激されて、地域がそういう方向を目指した未来創成へと意見が、が一つとまとまろうとしています。何かそういう一つのモデルを造れば、ものが前に進まない現状を打破する突破口になるのではないかと思います。そんな中でとりわけ子供たちの環境教育が大事だと思います。

子供たちを環境教育の場に招くと、ご両親が付いてくることが多いのです。ご両親は「もういい加減にして早く帰ろう」との態度が見え見えになることが多々見られます。一方、おじいちゃん、おばあちゃんが付いてくると、じっくり孫と付き合う様子をよく見かけます。世代を超えたおじいちゃんおばあちゃんと孫の組み合わせによる環境教育によって世の中を変えていくというのがいいのではないかと思います。

(布村) 次世代へ残すものの前に、今は人々が自然自体から意識が遠ざかっているという問題があります。以前、植物園を作る話合のとき若いお母さんから、「植物は良いが虫がまったく来ないようにしてほしい」という意見が出ました。もちろん昆虫がないと植物が育ちませんし、虫と人間は、害虫と言っているものも含めて非常に関係しております。

また、子供たちを山や海、川などの自然へ連れていくと、どのようにして自然と触れ合っているか分からないという場面がよくあります。「カニを捕まえてみよう」といっても、捕まえ方が分からなくて鉢ではさまれたりしています。セミもカエルも怖くて触れない子がすごく多くなっています。自然と付き合い方を体験することが生き物に対する思いやり、ひいてはほかの人間を傷付けたら駄目だということに関係してくると思うのです。子供たちは特に強く風土や自然の影響をもっても強い影響を受けます。水辺や山野で遊ぶことによって五感が鍛えられます。また、野外体験は下の子を思いやる心とか、いろいろな想像を育み、アイデア・工夫を促し、困難に立ち向かう力を付けることに効果的です。創造性を特に伸ばせるということを考えると、大々的に取り組む必要があると思います。

それから、自然界にはとにかく割り切れないものがいろいろあります。単純な答えがないわけです。幼児を含め、子供たちは室内でパソコンやゲームを多くやるようになっていますが、受験勉強やゲームでは、有理数の選択肢から選ぶという思考方式が多く、「AかBか」だけ選びなことになるってしまいます。これでは多様な自然界が分からないし、複雑な社会の問題も対応できないことが多いと思います。

さらに、自然自体が変わってきているので、自然体験をすることが難しくなっていることに加えて、子供たちも随分忙しくなっていて、機会があってもなかなか行けない、学校



行事さえ町内対抗のスポーツの試合があったりして忙しくてなかなか行けないと状況があります。また、子供が少なくなって危ないことをさせないようになった。たとえばボランティアや町内行事でいろいろな所に連れていこうと思っても、万一事故があったら責任を問われるため、昔は海へ行ったり川へ行ったりしたもの、今はせいぜいプールしか行けないのです。自然に触れなくなって、だんだんと子供たちの感覚が退化してきている気がします。生物としてだんだん自滅の道を歩んでいるのではないかと感じます。

私が前に大阪の博物館にいるときは、野外行事で大体 10km ぐらい歩かせても平気だったのですが、富山では 3km 歩いたら「もうやめましょう」と言うのです。車社会でほとんど歩かなくなったためでしょう。富山は自然が豊かなように見えますが、意識し自然に触れる機会を増やすことが意識の伝承のためにも大切であると思います。

さらに、現代は多様な情報が、テレビ、パソコンやスマホなどを通して得られるようになっていきます。昔はおじいちゃんやおばあちゃんから、いろいろなことを教わりましたが、今日は核家族化、少子化して、知識や文化が伝わらなくなりました。意識して学校のプログラムやさまざまな団体の活動として取り組まれています。

ところで、近々、新幹線も開通し人の交流が多くなっていきます。富山県の独自性を自覚し、他の県の人と話をできること、たとえば、富山県の高校生が例えば東京の大学などに行ったときに、自分の郷土はこんなのですよと明快に言えるようなことが必要です。

富山の本当はすごく特徴的なアイデンティティーの豊かなのに、浸透しておらず、その独自性が分かりにくいです。また、まだ知られていないことや思い違いがあります。

例えば雪というのは冷たいというイメージがあるのですが、雪は人間から見たら寒いのですけれども、ある種の生き物から見ると暖かいものなのです。根雪の下の温度を測ってみると湿度 100%、温度も 0℃よりプラスぐらいか、あるいは 0℃ぐらいです。これは液体から固体に変わらない、まだ液体のままにいられるギリギリの温度なので、虫が意外に多くみられます。ところが、太平洋側へ行きますと、乾き過ぎている上に寒過ぎて生き物が生きていけないのです。植物でも、富山県の雪の下にある植物を太平洋側に持っていきますと、寒さで枯れてものがあります。雪は例えば大きな布団であるというようなこともまだまだ知られていません。このようなことは多くあります。

郷土の独自性を見直し、次の世代に生活の知恵や文化とともに伝えるためのシステムとして博物館や学校などで大いに普及することが必要だと思います。

(米原) ありがとうございます。佐伯先生。

(佐伯) まとめとして二つほどのことを申し上げたいと思うのです。一つは、自然を忘れると人間が退化するのではないか。進化論というのがありますけれど、本当に進化しているのかどうか。季節感、四季折々の感覚とか生活技術とか、そういうものから私たちの生活はだんだん遠ざかっているのではないかということです。

近ごろ、岩手県の名久井文明さんという考古学者が民俗考古学というのを提唱しております。考古の出土品は土器とか石器というものばかりですけれども、たまに籠とか、小矢部の桜町ではコゴミが出てきましたね。そのように植物性のももあるのです。彼は籠の編み方とか縄のない方とか、そういうものと現在の民俗事象とを合わせて、そこにつながりを求めようとする作業をやっているわけです。彼は民俗考古学を提唱していて、この前も五箇山に彼が来てご案内をしたことがあるのですけれども、私たちの生活は縄文の人たちからどれだけ進化しているのだろうかということを感じるわけです。

それからもう一つ申し上げたいのは、富山県の人にはよく「おあたえさま」という言葉を使います。おあたえさま。おかげさまでとか、さっきの話、ありがとうとか、もったいないとか、天与の恵みという意味で「おあたえさま」ということを言います。この「おあたえさま」というのは、何もプラス面だけでなしに、例えば津波があるとか洪水があるとか、富山県は随分洪水にもいじめられました、それも「おあたえさま」と理解するわけです。決してそれをマイナスとして受け止めていない。これは、天与のおあたえさまだと。そして、それをしっかりまともに受け止めて、それを跳ね返そうとする、そういうバネになっているわけです。そういうものが越中人の自然観なり価値観なりだろうと思うのです。

よく越中人は働き者と言いますが、雨の多い風土の中から、雨が降っても働く働き者が生まれたのではないのでしょうか。越中では雨で田んぼをしないと、する暇がありませんから、雨が降っても雪が降っても仕事をします。そういう中から越中人の働き者というのが出てくるわけです。世界中で一番働き者は日本人だという。その日本人の中で越中人が一番働き者だという。すると、越中人というのは世界一の働き者ではないかなと思うのですけれども、そういう考え方、自然観、価値観というのは、この「おあたえさま」という言葉に象徴されているのではないかなということを感じようようになりました。

これは浄土真宗的な考え方かもしれませんが、何かそういうふうにと考えると自分で納得できるようになりました。そんなことをまとめとして申し上げたいと思います。

(米原) ありがとうございます。3人の先生方からまとめをいただきました。最終的には、やはり今の時点をどうわれわれが認識するかというところからスタートして、例えば自然は昔のままではない、自然自身も変わってきていると。われわれの生活そのものも変わってきていると。その中で何がより良い選択なのかということ踏まえながら、先ほど田中先生がおっしゃった環境教育というものを、おじいちゃん、おばあちゃんのお力もお借りして進めていくというお話でした。

それから、やっぱり真宗王国富山県民としては、何となく、気付かなくても「おあたえさま」の気持ちをそれぞれがお持ちではないかと。それをさらに次世代につないでいくということが、自然というものをもっとわれわれは身近に感じることの一つの方向性ではないかと、このようなまとめをいただきました。ありがとうございます。

それでは時間も参りましたので、山折先生に今までのディスカッションの方のご講評をお願いしたいと思います。山折先生、よろしくお願いします。



#### ディスカッションの講評

山折 哲雄 氏 (元国際日本文化研究センター  
所長、宗教学者)

ただ今3先生から、大自然の中で森と里と海が相互連環の関係をさまざまに結んで、われわれに実に豊かなものを与えてくださっているというお話を伺いまして、大変勉強させていただきました。とてもとても講評などと恐ろしくて申し上げることはできません。けれども、これはやっぱり「おあたえさま」ですか、こういう仕事は。

実は、お話をいろいろ伺いながら、思い出していたことが一つございました。それはある昔話と申しますか、民話と申しますか、「桃太郎」という昔話がございます。桃太郎というのは、ご承知のように、おじいさんとおばあさんが里で生活をしておりまして、おじいさんが山に入って柴刈り、おばあさんが川で洗濯。すると川上から桃が流れてきて割るとかわいい子供が誕生した。大事に、大事に育てると、手下を連れて鬼ヶ島の征伐をしたと

いう。戦争中から、私なんかはこの桃太郎昔話を教えられてきたのですが、実はそれは違うよと。桃太郎という昔話の原型はそんなものではないよということを明らかにされた方が、民俗学者の柳田国男でございました。

柳田さんは、桃太郎民話というのは日本列島至る所に伝承されてきた話である。そういうものをできるだけ集めて、分類して、分析して、最終的に一番の桃太郎話の原型になるものはこうだというものを出されたのです。それは、おばあさんではなしに、おじいさんの方が中心の話なのだ。

おじいさんが山に入って柴刈りをして、その柴を背負って戻ってくると、そこに沼があった。その沼の中に刈り取ってきた柴全部を投げ入れると、その沼の底から美しい女性がすーっと浮かび上がってきて、見ると腕に一人の子供を抱いている。その美しい女性がすーっと岸边に立っているおじいさんの所にやって来て、こう言った。「あなたは1日の労働の結晶の柴を湖に、あるいは沼に投げ入れた。そのお返しにこの子供をあなたにあげるから大事に、大事に育てなさい」。言われたとおり、それを受け取っておじいさんはその子供を見ると、これが醜い子供だった。しかし、言われるままに醜い子供を里に連れて帰って、おばあさんと一緒に大事に、大事に育てたら、見事な桃太郎少年に成長した。これが桃太郎昔話の原型だということを証明されたのです。

富山県では桃太郎話がどういう形で伝えられているかまだ聞いておりません。後から伺うことができれば伺いたいと思うのですが、その桃太郎についての柳田さんの考え方で、私が二つだけ謎だと思っていることがある。どうしてもそのことについて柳田さんご自身が答えていない。

一つは、なぜおじいさんが柴を沼に投げ入れたか。この理由を柳田さんは何も言っておられません。もう一つは、浮かび上がってきた美しい女性が腕に抱いていた子供がなぜ醜い顔をしていたのか。これも柳田さんは説明していないのです。これは私、10年来、自分自身、柳田さんから与えられた研究テーマであるとずっと考え続けておりました。

そうしたら、4~5年前ですね。私が福井県の三方五湖に行ったときに、その話をしたのです。そうしたら、その三方五湖に縄文博物館という素晴らしい博物館がありますが、その館長さんがこういうことをおっしゃった。「いや、それは柴漬け漁ではないのですか。柴を投げ入れることによって魚が集まってくる。その魚を捕るのだ」と。その柴漬け漁は今、三方五湖でもやっていますよ」と。その漁具を見せていただきました。びっくりしましたね。柳田国男とあろう人がなぜこのことに気が付かなかったのかと思いました。

それで、次に琵琶湖に行きましたら、琵琶湖の館長さんが柴漬け漁に対する資料をたくさん持ってきて、私にくださったのです。ああ、これはまず間違いないなど。この桃太郎昔話の中に柴漬け漁の問題が含まれていた。それが一つです。

もう一つの、なぜ子供が醜い表情をしていたか。柳田さんの説は、これは母親の女性と子供の2人を大事にする母子神信仰がこの物語の中心だとは言っているのです。確かに大昔から森、山の世界で信じられているものに、その女性というのは水の神様だと。水分神（みくまり）から水を里に与える、そういう信仰を象徴する神様であるから女神であり、水の神様だと。そうすると、その子供であるから子供神だ。母親神と子供神に対する日本人の一番古い古層に横たわっている信仰の表れだ。これが柳田さんの説なのです。

ところが、なぜ子供が醜いかということがもう一つよく分からない。私なりに解釈したのは、先ほど申し上げました良寛の話なのです。子供というのは、やっぱり生まれたときはサルみたいな顔をしていますよね。サルと言ったらいけないのかもしれませんが、それから世の中の子供にはいろいろな子供があつて、不幸な子供、親に死なれた子供、そういう子供たちがたくさんいる。その子供を普通の子供に育てなさいという、そういう教訓みたいな話があつた物語には含まれているのではないかと。醜い子供をすつと出して「大事に育てよ」、これは啓示のような話ですよ。

そう考えたとき、この桃太郎という昔話は奥深い話だと思ふようになりました。まず、森の背景がありますね、この物語には。川上から桃が流れてくるというのもそうかもしれない。水に対する信仰、これは奥山に関わる重要な要因ではないか。それから、おじいさんが山に入って柴刈りをする。これは恐らく里山ですよ。里の問題がここに出てくるわけですね。その子供を村に連れて帰って大事に育てる。今日、お話をいろいろいただきました、森、それから里、海。この三者連環の日本的自然の中で生み出された物語だなということをしみじみ、今日あらためて感じさせていただきました。

もしもそうだとすると、金太郎の物語は奥山の話だろうなと。クマと金太郎ですよ。一寸法師は富山湾の話だなと。いろいろ想像が広がりました、こういう形で次の若い世代に物語の形で、森、里、海の連環、大自然の循環と再生の世界を伝えていくということがこれから必要になるのかなあといったような感想を持たせていただきました。どうもありがとうございました（拍手）。

**（米原）** どうもありがとうございました。もう少し時間があれば山折先生のお話をもつ

とお聞きしたいと皆さん思っておられるのではないかと思います、時間というのは非情なものでそろそろお約束の時間に近くなりました。桃太郎のお話は今日のディスカッションの本当のまとめになったような気がします。森、水、里、あるいは森、川と海、里ですね。この連環が実はわれわれ先人の中に記憶として残されて、それが伝承なり、あるいは伝説を生んでいく。これを単なる物語としないで、ここからわれわれは何を学ぶべきかも考えながら環境教育も含めて進めていきたいと思っております。

本日は山折先生をはじめ、田中先生、布村先生、佐伯先生、本当にありがとうございました（拍手）。非常に不慣れな司会でしたが、ようやく時間が参りまして荷を終えたような気がします。これも本日ご来場の皆さまの非常に熱心な、目付き顔付き心遣い、全部こちらの方に参りまして一生懸命やらなければいけないなということで、パネラーの先生方とお話ししながら盛り上がったような気がします。本当にありがとうございました。お帰りになりましても皆さんの中から今日のお話を踏まえて、いろいろな方にお伝えしていただければこのシンポジウムも大変意義があったと思っております。

それでは若干時間が残りましたが、本日はこれでお開きとさせていただきます。2012年の日本海学シンポジウムをこれで終わります。本当にありがとうございました（拍手）。